第 56 回プリマーテス研究会

アフリカの自然

場所:　　日本モンキーセンター

内ビジターセンターホール

日程:　　2011 年 11 月 26 日(土)・27 日(日)

－プログラム－

11 月 26 日（土）
12:00-13:00 受付

13:00-13:30 挨拶
市川光雄　（日本モンキーセンター）
13:30-14:20 「アフリカ学の出発－初期のアフリカ類人猿調査隊のことなど－」
西邨顕達（同志社大学）
14:20-15:10 「アフリカの自然と近年の環境変化」
水野一晴（京都大学）

15:10-15:40 休憩

15:40-16:30 「チンパンジーに食べられるサル:アカコロブスの生態と対チンパンジー戦略」
五百部裕（椙山女学園大学）
16:30-17:20 「ボノボの住むコンゴ盆地の大熱帯雨林：その現状と将来」
古市剛史（京都大学）

17:30-19:30 懇親会（参加費 3000 円）

11 月 27 日（日）
9:30-10:00　受付

10:00-10:50 「里の動物として生きる西アフリカのチンパンジー:人とアブラヤシとの 4000 年史」
山越言（京都大学）
10:50-11:40 「エコツーリズムと環境教育－森と野生動物とヒトが共に歩む未来を目指して－」
川口芳矢（よこはま動物園）

11:40-12:30 総合討論

－開催趣旨－

　　アフリカは日本モンキーセンターが発足して以来、その主たる研究の地でした。そして、代々の研究員が繰り返し遠征してきた土地であります。今回のプリマーテス研究会では、半世紀以上に及ぶアフリカにおける自然史研究をふりかえり、幅広く「アフリカの自然」を満喫できる会にしたいと思います。また、自然破壊やさまざまな動植物の絶滅が危惧されるなか、現場でどのような取り組みを行っているかを知り、教育を通して私たちに何ができるかを考える機会にできたらと思います。

－発表要旨－

アフリカ学の出発

－初期のアフリカ類人猿調査隊のことなど－

西邨　顕達
同志社大学

「日本モンキーセンターゴリラ調査隊（1～3 次、1958～1960)」の成果を踏まえて、1961 年今西錦司を代表者に「京都大学アフリカ類人猿学術調査隊 Kyoto University African Primate Expedition (KUAPE)」（第 1 次隊）が発足した。KUAPE は第 4 次隊（1965）から代表者が伊谷純一郎に変り、第 6 次隊（1967）まで続く。私は KUAPE 第 1 次および第 2 次隊に参加した。ここでは主に 2 つのことを述べたい。第一は半世紀を越すアフリカ類人猿調査史の最初 10 年間のこと。この間に対象がゴリラからチンパンジーに変り、チンパンジーは数年の試行を経て、餌づけが成功し、社会構造の詳細な解明が始まった。

第二はこの調査隊によって類人猿だけでなく、アフリカに関する様々な分野の研究、「アフリカ学」、が始まった、ということ。1960 年代前半までアフリカにおける学術調査は他になかったし、KUAPE 隊員には霊長類の研究者以外に様々な分野の研究者が含まれていた。このような調査隊を組織した今西錦司という人物の紹介もしたい。

アフリカの自然と近年の環境変化

水野　一晴
京都大学

近年アフリカではその多様な自然が地球温暖化等の気候変動の影響を受け、急速に変化している。アフリカにおいてキリマンジャロ、ケニア山、ルウェンゾリ山の３つの高山のみが氷河を有するが、その氷河が 10-20 年後には消滅すると推定されている。これらの高山では氷河の縮小や温暖化とともに高山植生等の生態系が大きく変化している。また、アフリカには世界最古の砂漠といわれるナミブ砂漠があり、季節河川沿いにのみ森林があるが、その森林も近年大量枯死という現象が見られる。砂漠という厳しい環境の中、その森林沿いにのみ人々が暮らし、多様な動物が生息しているが、その森林の動態は住民生活や動物の生態環境に大きく影響を及ぼす。本講演では、近年の温暖化とケニア山、キリマンジャロの氷河変動および植生動態について、またナミブ砂漠の森林変化と住民生活や動物生態との関係について紹介する。

チンパンジーに食べられるサル：
アカコロブスの生態と対チンパンジー戦略

五百部　裕
椙山女学園大学

チンパンジーは、同所的に生息する霊長類や有蹄類を狩猟・肉食することが知られている。そして、チンパンジーの長期継続調査が行われているタンザニアのマハレやゴンベ、ウガンダのキバレ、コートジボアールのタイでは、アカコロブスと呼ばれるオナガザル科のサルがチンパンジーにもっともよく食べられていることが明らかになっている。ではなぜ、チンパンジーはアカコロブスを好むのか？　アカコロブスはなにもせずに、ただチンパンジーに食べられるだけなのか？　チンパンジーによる狩猟はアカコロブス個体群の減少をもたらさないのか？　こうした点をアカコロブスや他のオナガザル科霊長類の側から研究した成果に基づき解説する。また合わせて、アカコロブスをはじめとするアフリカ産オナガザル科霊長類の社会生態的研究が、人類の進化史や霊長類の種分化の解明においても重要な役割を果たす可能性を持っていることについても紹介する。

ボノボの住むコンゴ盆地の大熱帯雨林：その現状と将来

古市　剛史
京都大学

空から見ると、人の爪あとなど何もないかのように見えるコンゴ盆地の大熱帯雨林。森林保護の必要性を説く私に「森なんていくらでもあるじゃないか」と答える村人の意見が、妙に説得力をもつし、ボノボなどとくに保護しなくてもいくらでもいるように思える。しかしこの森も、見えない形で確実にむしばまれ続けている。1996 年から始まった戦争の前は、伐採権を得た海外の木材会社が、大規模な伐採に着手していた。戦争中は、森に逃げ込んだ人々があちこちに小さな家と畑を作り、森は虫食いのあとのようになっている。そして今、バイオエネルギーが実用化され、たいして役に立たなかったこの森が、アブラヤシの畑という巨大な油田に変わる可能性が出てきている。私たちがボノボの調査を始めてから 40 年近くにわたる変化を見つめ、森とそこに住む動物の将来を考えたい。

里の動物として生きる西アフリカのチンパンジー：人とアブラヤシとの 4000 年史

山越　言
京都大学

西アフリカのチンパンジーは、コートジボワール西部のタイ森林など、限られた熱帯林に生息するいっぽう、セネガル南部などの乾燥地環境や、農業の影響を強く受けた二次的環境にも適応している。西アフリカ沿海地域には「パームベルト」と呼ばれる、アブラヤシを基幹とした田園景観が広がり、チンパンジーがネストや食物資源としてアブラヤシに強く依存する姿が明らかになってきた。西アフリカの在来農業システムにおいて、焼畑を介した人とアブラヤシの関係は独特かつ密接である。花粉分析などの研究から、アブラヤシ二次林の歴史はほぼ 4000 年前から発達したと推測される。チンパンジーを長きにわたって人里環境に適応した「里の動物」として見ることで、アブラヤシの実を対象にしたチンパンジーのナッツ割り文化の発達史を、新たな文脈に置き直すことが可能であろう。タイ森林では、ほぼ 4000 年前のチンパンジーのナッツ割りの考古学的痕跡が確認されており、このような年代の符合も興味深い。

エコツーリズムと環境教育

－森と野生動物とヒトが共に歩む未来を目指して－

川口　芳矢
よこはま動物園

動物園の飼育係を休職し青年海外協力隊員として赴任したウガンダ　カリンズ森林保護区。そこには多くの動植物と共に野生のチンパンジーが生息していました。そして、森林の周りには多くの村人もまた暮らしています。そんなカリンズ森林は、野生動物だけでなく地域の人々にとっても大切な場所でした。「野生動物や森林環境を保護することと、周辺住民の生活を守ること」その両立を目指してエコツーリズムを導入し、発展させることが私の役目でした。カリンズ森林での任期を満了し動物園に復職した後、飼育業務と並行してアフリカの森で私が見たこと、感じたことを盛り込んで、生息地で何が起きていて、私たちには何が出来るのかを皆さんに伝え一緒に考えられるようなプログラムを企画・実施しています。

本講演ではカリンズ森林で行った活動と、動物園で行っている野生動物と現地の人々、来園者をつなぐプログラムについて紹介し、森と野生動物とヒトが共に歩む未来について考えます。